

主体的・対話的で深い学びの研究 — 幼稚園教諭養成課程における実践 —

福山 多江子・生野 金三・大澤 洋美・香田 健治・永井 優美

I はじめに（生野）

2016（平成28）年12月中央教育審議会は、「幼稚園、小学校、中学校、高等学校及び特別支援学校の学習指導要領の改善及び必要な方策等について」の答申を発表した。そこでは、「学習指導要領の改善の方向性」の項において、「主体的・対話的で深い学び」の実現（「アクティブ・ラーニング」の視点）と題し、

子供たちが、学習内容を人生や社会の在り方と結び付けて深く理解し、これから時代に求められる資質・能力を身に付け、生涯にわたって能動的に学び続けたりすることができるようにするため、子供たちが「どのように学ぶか」という学びの質を重視した改善を図っていくことである。学びの質を高めていくためには、……「主体的・対話的で深い学び」の実現に向けて、日々の授業を改善していくための視点を共有し、授業改善に向けた取組を活性化していくことが重要である^①。

と指摘する。これは、「アクティブ・ラーニング」の視点からの授業改善である。ここでは、形式的に対話型を取り入れた授業や特定の指導の型を目指した技術の改善にとどまるものではなく、子供たちそれぞれの興味や関心を基に、一人一人の個性に応じた多様で質の高い学びを引き出すことを意図するものであるとし、さらにそれを通してどのような資質・能力を育むかという観点から、学習の在り方そのものの問い合わせを目指すものであるとする。

先に「主体的・対話的で深い学び」としたが、その内容をめぐって、答申は以下のように指摘する。

- ・学ぶことに興味や関心を持ち、自己のキャリア形成の方向性と関連付けながら、見通しを持って粘り強く取り組み、自己の学習活動を振り返って次につなげる「主体的な学び」が実現できているか。①
- ・子供同士の協働、教職員や地域の人との対話、先哲の考え方を手掛かりに考えること等を通じ、自己の考えを広げ深める「対話的な学び」が実現できているか。②
- ・習得・活用・探究という学びの過程の中で、各教科等の特質に応じた「見方・考え方」を働きながら、知識を相互に関連付けてより深く理解したり、情報を精査して考えを形成したり、問題を見いだして解決策を考えたり、思いや考えを基に創造したりすることに向かう「深い学び」が実現できているか^③。③

①では、学習者である子供自身が興味を持って積極的に取り組むとともに、学習活動を自ら振り返り意味付けたり、身に付いた資質・能力を自覚したり、共有したりすることが重要であるとしている。

②では、身に付けた知識や技能を定着させるとともに、物事の多面的で深い理解に至るために、多様な表現を通じて、教職員と子供や、子供同士が対話し、それによって思考を広げ深めていくことが求められるとしている。

③では、子供たちが、各教科等の学びの過程の中で、身に付けた資質・能力の三つの柱を

活用・発揮しながら物事を捉え思考することを通じて、資質・能力がさらに伸ばされたり、新たな資質・能力が育まれたりしていくことが重要であるとしている。

上記の「主体的な学び」「対話的な学び」「深い学び」の三つの視点は、子供の学びの過程としては一体として実現されるものであり、また、それぞれ相互に影響し合うものもあるが、学びの本質として重要な点を異なる側面から捉えたものであり、授業改善の視点としてはそれぞれ固有の視点であることに留意が必要である³⁾。例えば、導入の段階で主体的に学習に取り組めるよう学習の見通しを立てたり、学習したことを振り返ったりして自身の学びや変容を自覚できる場面、展開の場面で対話によって自分の考えなどを広げたり深めたりする場面、加えて学習者が思索し、教師が教える場面等を如何に組み立てるか、といった観点で授業改善を進めることが重要である。

以上のことと踏まえ、本稿では、模擬保育の計画より模擬保育の実践、その振り返りを通して、教師に求められる子ども観、保育観、指導観等が如何に深まったかを探ることを目的とする。

II 模擬保育

【実践1】：アクティブ・ラーニング形式による指導計画作成の授業実践例

昨今、学びの質保証の観点から、大学の授業改革が進展しつつある中、保育者養成校においてもアクティブ・ラーニング形式の授業開発が行われている。「新たな未来を築くための大学教育の質的転換に向けて——生涯学び続け、主体的に考える力を育成する大学へ——」（中央教育審議会答申、平成24年8月28日）において、アクティブ・ラーニングは「教員による一方的な講義形式の教育とは異なり、学修者の能動的な学修への参加を取り入れた教授・学習法の総称。学修者が能動的に学修することによって、認知的、倫理的、社会的能力、教養、知識、経験を含めた汎用的能力の育成を図る。発見学習、問題解決学習、体験学習、調査学習等が含まれるが、教室でのグループ・ディスカッション、ディベート、グループ・ワーク等も有効なアクティブ・ラーニングの方法である」と定義されている。このことを受け、東京成徳短期大学の2年次に設置されている教育課程総論の授業において、アクティブ・ラーニング形式による指導計画作成の授業実践を試行した。学生が主体的・対話的で深い学びを指導計画の作成において実現できるよう、以下の授業実践を行い、授業開発研究を行っている。

1. 研究方法

研究対象：東京成徳短期大学幼稚教育科平成28年度入学の学生（2年生186名）

研究方法：幼稚園教育実習（責任実習）の指導計画とその振り返りを分析する

研究期間：2017年6月～7月

2. 授業の手順

(1) 実習前の授業内容

【実践】 1

指導案の作成について

教育課程総論の授業において指導案作成について講義を行う。

1年時に保育実習指導の授業において大まかな流れと指導案の書き方については指導済みであるが、より具体的に詳細に指導する。

① 最近・昨日の子どもの様子の把握 (DVD) 視聴により、発達段階や子どもの様子を理解する。⇒メモを取る

② から、翌日の予想される子どもの姿を記入する。

③ ねらいと内容の違いと書き方を理解する。

ねらい⇒子どもたちにどうあってほしいのかという保育のねらいを記入する（子どもの心情・意欲・態度の育ちの側面から）子どもを主語として記入する。

内容⇒その日またはその時間の主な内容を具体的に簡潔に記入する。その際に子どもを主語として記入する。

④ 環境構成について

その時の環境図を記入する。環境図のみならずその時に必要なもの（道具の名前や必要な個数）や準備するもの、保育者や子どもの立ち位置など、子どもの動きなどを配慮して記入する。

この時に、保育者が主語となるように記入する。

⑤ 予想する子どもの姿について

子どもがその時にどのようなことを行い、話をするかを、予想して記入する。この時に、子どもが主語になるように記入を行う。

⑥ 保育者の援助・配慮について

保育を行うにあたって、子どもたちに必要な援助や配慮などを具体的に記入する。

この時に保育者が主語となるように記入する。

書き終えた際に、文章の時制はすべて統一して書かれているかを確認する。

これらのことと幼稚園・保育所において1日を通しての子どもの活動のDVDを視聴しながら確認を行う。

この流れを経て、実際に子どもに適した製作活動を行い、その時にしなければならない援助や言葉かけ、子どもの行動や言動を考慮し、指導案を作成する。

(2) 責任実習

各園で子どもの特徴や姿に基づき指導計画を作成する。その際、園の実習指導教員などによる指導計画においての指摘を受け、加筆修正する。それをもとに責任実習を行う。

(3) 実習後の授業内容

各自責任実習の指導計画を持ち寄り、指導計画の振り返りを行う。グループの中でたたき台となる指導計画を選び、それをよりよい指導計画にするための話し合いを行う。その後、グループで協同して指導計画を作成する。最後にまとめとして指導計画作成の重要なポイント

トを五つ書き出す。

3. 結果と考察

授業手順の(1)、(2)の過程を経て、実習後、グループで行った指導計画作成の事例を紹介する。以下、学生が指導計画作成段階で話し合った内容とそれをもとに考えた指導計画作成のポイントを示す。引用は全て学生の記入したとおりに記したものである。

(1) 「紙飛行機ロケットを作る」指導計画のチーム（6名）（5歳児）

- ・実習時に園の先生から「年長は時間を意識できるように先に声掛けをする」という指摘を受けたことから、学生たちは「「40分」とかではなく「長い針が“9”などと声掛けをする」と合意し、それを新指導計画の援助・指導の留意点に加筆した。
- ・製作準備の際「一人一人の個人差を把握し、それぞれに合わせた声掛けをする」ということをグループで確認し合い、新指導計画の援助・指導の留意点に記載した。
- ・製作物を実際に使って遊ぶ際の留意点として「事前に遊び方の説明をして、失敗してしまうパターンも考えさせるように促す」と記した。さらに「「こっちの向きだと飛ぶかな？」→子「飛ばない！」→折り紙の向きを理解する」と具体的に考えた。

以上の話し合いを経て指導計画をグループで一つ作成した後に、指導計画作りのポイントを次の五点にまとめた。

- ① 子どもの目線に立ち、さまざまなパターンを考える。
- ② 子どもが失敗した時の予測をし、対処法を考える。
- ③ 個人差を把握する。
- ④ 活動の意図や導入をきちんと考える。
- ⑤ 子どもの興味・関心を第一に考える。

(2) 「ジャンピング・カエル」指導計画のチーム（5名）（4歳児）

- ・実習時に園の先生から「子どもの興味を上手く引き付けるように工夫する」という指摘を受けたことから、学生たちは「製作する物を見せ、子どもたちの意欲関心を高める」と加筆した。
- ・「活動が早い子もいれば遅い子もいるので対策をよく考える」という指摘を受けて「分からない子どもに援助をする」と加筆した。
- ・先生の「子どもの動線をよく考えて、環境構成を整える」という指摘に対して学生は「安全に過ごせるよう配慮し、順番に道具をとりにいったりと工夫をする」と話し合い「混雑しないようグループごとに片付けをするよう促す」と加筆した。

以上の話し合いを経て指導計画をグループで一つ作成した後に、指導計画作りのポイントを次の五点にまとめた。

- ① 子どもの目線に立ち、子どもを主体として書く。
- ② 子どもの発達段階・友好関係をおさえ、活動を設定する。
- ③ 援助・声かけを具体的に書くよう心がける。
- ④ 一日の流れを把握した上で要点をおさえて書く。
- ⑤ めげない気持ちを持ち、あきらめない！！

これらの事例から共通点を見ていきたい。まず上記の下線部に注目されたい。学生たちは「長い針が“9”」「一人一人の個人差を把握し、それぞれに合わせた声掛けをする」「製作する物を見せ、子どもたちの意欲関心を高める」「混雑しないようグループごとに片付けをするよう促す」と記しているように、子どもの主体性を重視した保育や個人差に配慮して保育を行うための工夫をグループで話し合って検討することができている。一方、二重下線部の「こっちの向きだと飛ぶかな?」という声かけや、「分からぬ子どもに援助をする」という書き込みに見られるように、検討はしたもののそれを指導計画に適切に反映させることができなかったり、発達段階に合わない声かけや不必要な声かけを記したりする様子が見られた。また、「事前に遊び方の説明をして、失敗してしまうパターンも考えさせるように促す」という記入に関しても、言葉の面からは、考えさせるという言葉は、保育者主導型の言葉であるため、記入の工夫もしなければならない。このことについての話し合いで指摘は見られなかった、もう一点、事前に遊び方の説明とあるが、幼児の主体性を考慮するのであれば遊ばせてみて、失敗をしながら工夫を重ね、より楽しい遊び方を子どもなりに考えさせるという意見もあっても良いのではないかと考えられるが、その点も不十分である。

このように学生たちは各自の指導計画をもとに話し合うことで、それぞれの実習経験を総合化し、よりよい指導計画を作成するという目的に向かって協同したこと、新たな気付きや視点を得ることができた。ただし、まだ養成段階であるため、適切な書き込みをすることが難しい面も多々見られたが、このような実践的授業を経て、現場で指導計画を作成し、その実践に取り組み、振り返ることでその基盤が築かれていくと考えられよう。

なお、本授業実践を通して、アクティブ・ラーニング型授業の課題が見えてきた。第一に、チームごとの学びの質に差が生じる点である。本授業では、学生の責任実習の経験を材料としてアクティブ・ラーニングを行ったため、各自の実習の質が指導計画作成プロジェクトの質に影響を与え、それはチームごとの学びの差となっていった。第二に、アクティブ・ラーニング形式の授業を行う際、同手法を探る意義が学生自身に伝わるか否かで、学習のモチベーションとそれに伴う効果がかわってくる点である。アクティブ・ラーニング形式の授業においては、学生が主体的・対話的で深い学びをするための環境が重要であるため、今後は、チームメンバーの構成の調整や、アクティブ・ラーニング形式を採用する意図を学生に周知するために、より丁寧な指導および説明を行う必要があると考える。

【実践2】：保育指導方法演習における模擬保育 — 折り紙の指導 —

1. 模擬保育の設計

幼児が主体的に学ぶためには、遊びや活動の本質を学生自身が自らの学びの中で気付き考え、それに基づいて保育を考えて実践することが必要であると考える。そこで、本年度行った授業科目「保育指導方法演習」における学生の意識の変容と指導内容について実践例とともにその内容を考察する。

授業科目「保育指導方法演習」では2年次において、「①発達に応じた保育教育の方法について知るとともに、演習や模擬保育を通じて体験的な学習を通して保育の基礎技術を習得する。②他者と協力・連携をして学習をすることを通して保育者としての資質を身に付ける等を目的として授業を行う。

3セメスターでは、実習に向けての基礎知識の確認とともに実践における指導の展開を踏まえた実践指導を行っている。4セメスターでは、15回の授業を5つのユニットから構成し、学生自身が実習での経験をもとに模擬保育をグループで計画して実践を積み重ねている。ここでは、ユニット2の折り紙の指導についての実践について取り上げる。

授業計画 ユニット2 折り紙の設計は以下のとおりである。

ユニットのねらい 〈遊びの教育的意義と指導方法 折り紙〉

1回目 折り紙についてのディベート

4人から5人のグループで、折り紙が保育に必要派と不必要派に分かれて討議を行う。その後、討議の感想と自分の意識の変容を確認して、折り紙の手順書の作成の計画準備を行う。

2回目 折り紙の手順書の作成

自分の計画準備した手順書の作成をする。作成の振り返りを個々に行う。

3回目 手順書を使った模擬保育と指導案の作成

ディベートをしたグループの学生同士で、自分の作った手順書を使って模擬保育を行いそこでの気づきや改善点を振り返りまとめる。その後、指導案の作成を行う。

以上のようにユニットごとのテーマにおいて、様々な形で学生自身が協同で課題に取り組む中で、模擬保育も含めアクティブ・ラーニングを実践できるように設計をしている。

2. 模擬保育の実践

模擬保育に至るまで

①ディベートの振り返り グループ

- ・折り紙が子どものいろいろな力を伸ばすことに気が付いた。
- ・折り紙について今までただ遊ぶものだという考え方しかなかったが、これからは目的をもって考えたいと思った。
- ・折り紙が苦手な子どもの気持ち気が付いた。
- ・折り紙より外で遊ぶ方がいいと思っていたが、折り紙の良さにも気が付いた。
- ・折り紙が苦痛にならないような方法や指導をしたいと思った。

②手順書の作成と振り返り 個人

- ・はじめは簡単だと思ったが、予想以上に時間がかかって大変だった。
- ・子どもが見て分かるためには、細かなところまで分かるようにしなければいけないのが大変だった。
- ・作っていくうちに、あそこもここも分かりやすくしなければと手順が増えてしまった。
- ・手順がものすごく多くなって大変だった。一つの折り紙にこんなにたくさんの手順があるなんて知らなかった。
- ・説明の文章をどのように書こうか、言葉が浮かばずに苦労した。説明が子どもに分かるかが不安である。

模擬保育の実践の振り返り

①自分が指導をする

- ・イメージですぐにうまく伝えられると思っていたが、実際に言葉を添えて説明するのが難しかった。
- ・自分で作ると説明をすることの違いを感じた。指導の仕方をこれから勉強したい。
- ・言葉だけで説明をするより、手順書があったほうが数段教えやすいと思った。レポートリーを増やしたい。

②子ども役になって指導を受ける

- ・子どもの気持ちがよく分かった。できるようになっていくと嬉しい。
- ・確認をしながら進めるとわかりやすいことが分かった。
- ・言葉で全部説明しなくても見て分かる部分がある。

③互いの良かったところをメモに書いて渡す

- ・ゆっくりと同じ方向で教えてくれたので良かった。
- ・優しい口調がよかったです。
- ・手順書が細かくてわかりやすかったから、説明がすぐにわかった。

指導案作成

- ・指導案の作成は、授業時間内で終わらないため事後学習として後日提出を求める。

3. 結果と考察

これまでの気付きを生かしながら個々人が体験したことをもとに指導案を作成することによって、実際に幼児の言動を具体的に予測したり模擬保育において課題に感じたことを解決できるように指導方法を工夫したりする様子が認められた。それは、単に折り紙の折り方を教えるということではなく、どのようにしたら幼児自身が折り方が分かり、折り紙遊びを楽しむようになるかという視点につながっている。

ここで取り上げた「折り紙の指導」を通して、学生同士の対話的な学びが、指導の方法に生かされた模擬保育となっていることが認められる。このユニットの学習前は、「折り紙を教える」「教えるという意識がない」という学生の意識が、「子どもが分かるように」へと変化した。そして、模擬保育を行う中で、実際の指導の難しさを感じ自ら指導の方法を工夫していた。模擬保育での実践が、学生自らが気付きを導き問題の解決に向かわせていたといえよう。学生自身が気づき、考え、伝え合う経験が主体的・対話的で深い学びに向かう保育を導くためには大切である。様々な方向から、保育の内容や遊びそのものをとらえながら授業を計画していくことが、幼児の主体的・対話的で深い学びを引き出す指導につながっていくことになる。

【実践3】：保育内容演習（環境）における模擬保育の設計

1. 模擬保育の設計

(1) 本演習における目的と到達目標

本演習は、2年生の第4セメスターに位置付けられている。その目的は、「領域『環境』

の意義を他の領域とのかかわりをとらえる。そして、『環境』の領域では、子どもが周囲の様々な環境に主体的に関わり、それを生活に取り入れていこうとする力を培うことを理解する。これらを踏まえて、環境構成の指導の方法を指導案作成や模擬授業を通して体得する」である。

一方、到達目標は「知識・技能」①領域「環境」の意義やねらい、内容について理解することができる。②指導案作成や模擬保育の技能を身に付けることができる。「思考力・判断力・表現力」①環境構成の指導と指導案の作成の方法を構想することができる。②模擬授業と意見交流を通して、指導の改善方法を考え、表現することができる。「主体性・多様性・協働性」①幼児の生活を豊かにしていくための体験及び指導案作成、模擬保育等に主体的に参加するである。本学では、ディプロマポリシーや本演習の目的をもとに、3つの資質・能力の観点による到達目標を設定している。

(2) 授業計画の展開

本演習は、4つのユニットから構成されている。第1のユニットは1回～3回で、幼稚園教育要領に示されている資質・能力や領域「環境」のねらいと内容、「幼児期の終わりまでに育ってほしい姿」等について学修する。4回～8回の第2のユニットでは、領域「環境」の内容を中心としたフィールドビング体験、モビール、飛び出すカードの作成などの演習を通して領域「環境」と他の領域との関連や「幼児期の終わりまでに育ってほしい姿」との関連について、グループワークを通して、理解を深めるようにしている。また、この演習を通して、保育の指導計画や指導案作成に役立てるようにしている。9回～12回の第3のユニットでは、指導計画作成の基本的な考え方を学修し、指導計画や指導案を作成する。ここでは、作成した指導案をもとに、類似した活動ごとに1グループあたり4名程度のグループに分ける。そして、グループごとに学生個々人が持ち寄った指導案を検討し、模擬保育の内容を決定する。さらに、決定した模擬保育のねらいや内容をもとに、学生は、必要な材料や道具、発問や説明などについてグループ内で検討する。13回・14回の第4のユニットでは、模擬保育と意見交流を実施している。ここでは、保育者、子ども役、模擬保育の評価者に分かれて学修をする。

このように、ユニット間のつながりを重視した授業計画を立案し、展開することにより到

表1 保育内容演習（環境）の授業計画

回数	授業内容
1回	オリエンテーション 保育内容5領域における領域「環境」とは
2回	領域「環境」のねらいと内容
3回	子ども発達と環境、環境の構成
4回	動植物にかかる保育の実際
5回	自然現象、物にかかる保育の実際
6回	数量・図形、標識・文字にかかる保育の実際
7回	園外保育、社会・地域社会にかかる保育
8回	保育観察
9回	指導計画作成の基本的な考え方
10回	指導計画の作成
11回	指導案作成の留意点
12回	指導案の作成
13回	模擬保育と意見交流(1)
14回	模擬保育と意見交流(2)
15回	まとめ

達目標を達成することができると考えた。また、講義を通して幼稚園教育要領の要点について学修するとともに、演習での活動を通して気付いたことをグループでイメージマップにまとめて整理・分析した内容について、学生が発表するようにしている。つまり、講義だけではなく、体験活動とグループワークを取り入れたアクティブ・ラーニングによる学修を通して、学生が主体的・対話的で深い学びができるよう学修を設定している。

(3) 保育の指導計画と部分指導案の作成の手順に関する学修

① 指導計画の作成に関する指導

本演習では、指導計画に関する内容として、以下の5点について授業を通して、学生に指導を行っている。すなわち、第1に、保育の計画の意義を理解することである。この意義とは、幼稚園や保育所などの集団保育の場は、子どもと環境との積極的なかかわりを可能にし、人としての基盤や学習の基盤などを培う意図的な場であること、園生活の全体を通して、子どもに必要な経験が積み重なるように、その時々に経験させたいことや身に付けさせたいことを明確にして、それにふさわしい環境を準備し適切に援助していく必要があることなどを学修する。保育者は子ども一人一人の発達の状態を把握し、クラス全体のその時期の発達課題を大まかにとらえることや経験させる必要のあることを明確にして保育を計画的に実施する。そして、計画の作成では、子どもの興味や関心、充実感を味わうなどの主体的活動を大切にすること、活動における前後のつながりや発展の見通しをもって積み重ねられるようにすること、柔軟に計画を修正することも大切であることを指導している⁴⁾。

第2に、教育課程と保育課程の設定である。これについては、地域文化や各園の実情に照らして、教育目標や保育目標を設定することが重要である。そして、具体的なねらい、内容を年齢ごとに編成し、園職員の共通理解が大切であり、さらに、家庭や地域の実態、子どもの生活経験や発達の過程を理解し、実態にあった計画を作成することが必要であることを指導している⁵⁾。

第3に、教育課程や保育課程をもとにして指導計画を作成することである。指導計画は、各年齢別に、またクラス別に保育者が具体的な実践計画を立てることが求められる。そこには、具体的なねらいや内容、環境の構成、子どもの活動の予想、保育者の援助の在り方など、保育者は何が必要で、いつ、どこで、どのように指導・援助したらよいのか見通しをもちらながら、園全体の職員が連携して保育の目標を達成するようにすることが重要であることを指導している⁶⁾。

第4に、指導計画の種類について理解することである。指導計画には、年、期あるいは月ごとの計画である長期指導計画、子どもの年齢ごと1年を想定した年間指導計画、子どもの発達の節目をとらえ具体的に期で区切ったものや月毎に計画する月間指導計画、週や1日の具体的、実践的な短期指導計画について理解する⁷⁾。さらに、子どもの発達の理解、興味・関心、遊び、自然とのかかわりにおいて、柔軟性ある指導計画を立案することや学びの場を的確にとらえて、子どもの豊かで多様な体験のために保育に生かす保育者の目や鋭い感性が必要であることを指導している。

第5に、ねらいと内容にふさわしい環境を構成することである。幼児教育では「環境を通して行う」ことを基本としていることから、場や空間、ものや人、身の回りに起こる事象、時間などを関連付けながら、よりよい環境の構成を考え準備することが求められるのである。

ただし、いつも保育者が環境をつくり出すのではなく、子ども自身が必要な環境を生み出すことを踏まえることが重要である。また、保育者は、予想される子どもの活動を想定するとともに、つまずきや行き詰まりに対して、適切な援助をすることが必要であることを指導している⁸⁾。

② 部分指導案の作成

部分保育指導案の作成については、読み手に理解されるように記載することが重要である。部分指導案には、①日付、天候、対象児の年齢、人数など、②最近の子どもの実態・様子、③ねらいまたは目標（子どもを主体とする）や活動の内容、④時間配分、⑤環境の構成（教材・用具、場の設定など）、⑥予想される子どもの活動、⑦保育者の援助・留意点などについて記述する。特に、活動の内容については、導入において、主たる内容に意欲がもてるようになること、展開において、安全への配慮、精神的・物理的援助、認め、励ましについて考慮すること、まとめ（終末）において、ねらいの達成を確認する働きかけ、これから保育活動への期待をもたせることなどを記述するようにすることを具体的な事例の検討をもとに指導している。

2. 模擬保育の実践

(1) 模擬保育の実際

実践では、6つのグループに分かれて、模擬保育を実施した。11月から12月に授業を計画をしたことからクリスマスに関する内容の指導案が多くみられた。各グループの模擬保育のテーマは、以下の通りである。1グループ「クリスマスツリーをつくろう」、2グループ「クリスマスバスケットをしよう」、3グループ「クリスマスカードをつくろう」、4グループ「伝言ゲームとフルーツバスケットをしよう」、5グループ「サンタさんをつくろう」、6グループ「じまんのマフラーをつくろう」である。

模擬保育の準備では、話し合いを通じて、模擬保育をする指導案を決定する。そして、その指導案についてのねらいや活動の内容、材料や道具の準備、15分間の模擬保育における役割分担や発問、説明内容の詳細についてグループごとに活動内容について検討し、細案を作成するようにした。

なお、本稿では、3グループの模擬保育に関する学生の振り返りと学生の評価を中心に論究する。

(2) 学生の振り返り

本実践では、模擬保育について学生に保育観⁹⁾、指導観¹⁰⁾、子ども観¹¹⁾を振り返りの視点としている。学生の3名の振り返りは、以下の通りである。

① 模擬保育者Aの振り返りの記述

まず、実際に子ども役をやってみて、子どもはどのような話し方をするのか、先生にどのような態度をとるのかを考えながら参加しないと保育者側も実際に指導が大変であると思った。だから、適切な発達段階を知り、子どもの気持ちになることが必要であると思った。

指導観では、子どもたちと関わる中で、子どもたちへの言葉がけを適切に行ない、子どもたちが楽しく活動を行えるようにしていかなければならないと思った。

保育観では、子どもたちが楽しめるように事前に準備を行い、子どもたちが楽しめるような工夫をしないといけないと思った。私は、子どもたちが楽しむことのできる保育を心掛けたいと思った。

② 模擬保育者Bの振り返りの記述

模擬保育を通して感じた保育観とは、子どもたちとどのように関わり、その子どもたちをどのように教育していくのが大切なのか分かった。私が考えた最良の保育は、子どもたちが楽しく、自分の意思を持って活動に参加することである。この模擬保育を通して、それができたと思った。

指導観で指導する上で留意すべきことは、子どもたちの安全を確認しながら活動することである。糊を口に入れたりしないか、はさみで手を切ったりしないかと確認しながら活動に取り入れることが大切であると思った。また、活動を理解できない子どもがいたら、手助けをしたり、補助したりしながら活動をする。

子ども観では、子ども自身が楽しい子ども時代を過ごせるのが大切である。この活動は楽しかったなど、子どもの印象に残る活動をしたい。季節ごとに活動を変えることで子どもたちも毎回楽しめる。今回は12月に模擬保育をすることで、次もやりたいという次の活動への楽しみができたと思う。子どもたち一人一人の活動の様子を見ることで、楽しんでいるかなどがよくわかる。子どもたちが楽しめる活動ができてよかったです。

③ 模擬保育者Cの振り返りの記述

保育観では、子どもがのびのび心から楽しめるように環境構成することと、一人一人と向き合い、手助けをしていくことが大切であると思った。個人個人で発達の速さが違う中、活動に対して何をするのかよく分かっていない子、技術的にできていない子に対して丁寧に指導することも大切であると思った。特に、保育士が複数いる場合は、1つの机に何人か立ち寄り、丁寧に一人ずつに声掛けをすることや、進んでいない子に援助してできるまで見守ることで全員が活動でき、一人一人が意味のある保育ができると思う。子どもの方では、年齢にあった行動、技術、言動で接することで、子どもの視点で見ることができる。そうすることによって、子どもがどういう心情なのか予想を立てることで、自分で保育をする時に子どもの視点で、考え、理解しよりよい保育を行える。また、特徴的な子どもに対してもどういうふうに対応するのかを考えることもできた。

模擬保育を通しての模擬保育者の記述結果は、以下の通りである。保育観については、発達段階や子どもの実態を理解すること、子どもが自分の意思をもって活動すること、子どもがのびのびと活動できることが記述されている。指導観については、子どもが楽しく活動できるようにすること、適切な援助をすること、見守ること、安全を確認すること、活動をつなげていくことが記述されている。保育観については、子どもの視点で考え方理解すること、子どもの心情を理解することが記述されている。

(3) 模擬保育の評価

模擬保育の評価の観点は、①発問・説明・指示の仕方、②非言語的手法、③子どもへの対応、④材料・道具などの保育環境、⑤態度の5つの観点について評価をすることとした。①発問・説明・指示の仕方の視点は、「a. 声の大きさ、話すスピード、言葉の選び方が適切である。b. 思考の広がりや深まりを引き出すような発問が工夫されている。c. 説明や指示が明確で一貫しており、授業者の意図が子どもに的確に伝わる」である。②非言語的手法の視点は、「a. 表情、身ぶり、手ぶり、体の動き、視線によるなげかけ等が適切である。b. 授業者の意図を効果的に伝えている。c. 学習者の反応を温かく受けとめている」である。③子どもへの対応の視点は、「a. 子どもたちの興味・関心を引き出そうと工夫している。b. 子どもへの声掛けの内容や対応の仕方が適切である。c. 子どもたち全体に目を配り、一人一人の進み具合を見ながら活動を進めていた」である。④材料・道具などの保育環境の視点は、「a. 月齢・年齢にあった適切な材料・道具が準備され、活用されている。b. 多様な学習活動が展開され、学習効果を高めている」である。⑤態度の視点は、「保育に対する熱意や意欲を感じられた」である。そして、各観点項目については、項目ごとに大変良好4点、概ね良好3点、やや劣る2点、劣る1点で評価し、その評価の理由について簡単にコメントするようしている。3グループの模擬保育を評価については、1グループの3名が評価者となり、評価を行った。

評価者グループの評価の結果は、表2の通りである。数値的な評価の結果としては、全ての模擬保育者について、どの評価者も大きなばらつきはなく、各観点を3ないし4で評価していることが分かる。評価者間の観点別の評価を見てみると、評価者Dは、全ての模擬保育者及び観点について3点で採点している。評価者Eは、全ての模擬保育者について「①発問・説明・指示の仕方」「②非言語的手法」については3点、「③子どもへの対応」「④材料・道具などの保育環境」「⑤態度」については4点で採点している。評価者Fは、模擬保育者Aの「①発問・説明・指示の仕方」の観点は、4点で採点している。しかし、他の模擬保育者及び観点については、3点で採点している。

一方、コメントの結果については、以下の通りである。評価者Dは、言葉掛けの丁寧さ、内容、指導の仕方や保育者の表情、子どもの観察などを評価していることから、「②非言語的手法」「③子どもへの対応」を視点に保育を観察しているといえよう。評価者Dは、子どもへの指示、声掛け、視線の位置、態度、創造力を高める働きかけのよさなどを評価していることから、「①発問・説明・指示の仕方」「③子どもへの対応」「⑤態度」を視点に保育を観察といえよう。評価者Eは、援助や言葉掛けの適切さ、見守りの様子のよさなどを評価していることから、「③子どもへの対応」「⑤態度」を視点に保育を観察といえよう。

表2 1グループによる3グループの評価の結果

模擬保育者	評価の観点	評価者D	評価者E	評価者F
模擬保育者A	①発問・説明・指示の仕方	3	3	4
	②非言語的手法	3	3	3
	③子どもへの対応	3	4	3
	④材料・道具などの保育環境	3	4	3
	⑤態度	3	4	3
	コメント	・言葉掛けが丁寧。周りをよく見ている。褒めながら創造力を促している。	・3人の先生が1つのテーブルにつくようになっていた。子どもたちと一緒に作品を作っていた。また、早くでき上った子どもに「違うのも作ってみよう」など声を掛けていた。できた子どもの作品をみんなに見せていた。	・「違う切り方したらどうなるかな」などアドバイスや、質問など、言葉掛けが適切であった。
模擬保育者B	①発問・説明・指示の仕方	3	3	3
	②非言語的手法	3	3	3
	③子どもへの対応	3	4	3
	④材料・道具などの保育環境	3	4	3
	⑤態度	3	4	3
	コメント	・笑顔で対応している。一つ一つの作品を丁寧に見ている。	・3人の先生が1つのテーブルにつくようになっていた。子どもたちと一緒に作品を作っていた。お手本として一緒に作って優しく教えていた。また、子どもと同じ目線になるように座っていた。	・子どもたちが作っている姿を見守っていたのがよかったです。
模擬保育者C	①発問・説明・指示の仕方	3	3	3
	②非言語的手法	3	3	3
	③子どもへの対応	3	4	3
	④材料・道具などの保育環境	3	4	3
	⑤態度	3	4	3
	コメント	・笑顔で対応している。作品一つ一つを見て言葉掛けしている。	・3人の先生が1つのテーブルにつくようになっていた。子どもたちと一緒に作品を作っていた。	・笑顔で子どもたちと向き合って活動していたのがよかったです。

3. 考 察

3 グループの模擬保育における振り返りとその他者評価から学生の学びの様相について考察する。

模擬保育を通しての模擬保育者の振り返りならびに模擬保育の評価では、まず子どもの意志を大切にする積極性、子どもの思いや願いを生かす主体性、子どもがのびのびと活動する開放性など子ども中心の保育観が養われているといえよう。次に、子ども一人一人の関心・意欲を大切にすること、子どもの様子を適切に見極め援助すること、子どもの意欲や創造性などの資質・能力を高めること、活動の連続性を大切にすることなどの指導観が育まれているといえよう。最後に、子どもの視点で考え方理解すること、子どもの心情を理解することなど子どもはどのようなものであるかを理解しようとする姿が育っているといえよう。

このように、子ども一人一人を理解し、その実態を生かした保育を実践することを通して、資質・能力の伸長を図る保育観・指導観・子ども観が育成されつつあるといえるのである。

III おわりに

本研究は表題に示した如く、「主体的・対話的で深い学びの研究」の第一報である。以下のような成果が認められた。

まず、受講生である学生は、指導計画及び模擬保育を試みて、「子どもの主体性を重要視した保育や個人差に配慮した保育」の重要性に気付いている。これは、受講者である学生が指導計画の作成より実践に至る段階で、グループワークによって主体的にしかも対話的に学びを行ってきた成果である。ここでは、子ども観に立った指導観の育ちの様相の一端を垣間見る思いがする。

次いで、ディベートによって教材研究を行い、それ踏まえて指導案を作成し、模擬保育を試みた受講者である学生は、幼児の言動に鑑みた保育を構想し、実践することの重要性を指摘している。実践に当たっては、指導の方法を工夫することも重要であるとする。就中、「子どもに分かるように」と指摘していることから、子ども観を踏まえた指導観へと意識の変容が認められる。これは、正に受講者である学生同士の主体的な学びがその起因となっている。

さらに、模擬保育の実践後、受講者である学生が振り返りにおいて指摘している如く、これまで受講者は、保育を行う教師（指導者）の立場と保育を受ける子ども（学習者）の立場の両方を体験してきている。そこでは「子どもたちが楽しめるような工夫」「特徴的な子どもに対してどういうふうに対応」等と「子どもの立場」と「教師の立場」とを重ね合わせて保育を構想することの重要性に気付いている。子どもの実態に鑑みた保育の計画、保育の実践等を重要視していることから、ここでは子ども観、保育観・指導観の育ちの一端が認められよう。

〈注〉

1) 中央教育審議会「幼稚園、小学校、中学校、高等学校及び特別支援学校の学習指導要領の改善及び必要な方策等について」2016（平成28）年12月、p.26。

2) 同上書、pp.49-50。

- 3) 同上書、p.26。
- 4) 田尻由美子・無藤隆編著『保育内容 子どもと環境－基本と実践事例』同文書院、2012年、p.28。
- 5) 田尻・無藤、前掲書⁴⁾、p.28頁。
- 6) 田尻・無藤、前掲書⁴⁾、pp.28-29。
- 7) 田尻・無藤、前掲書⁴⁾、p.29頁、及び文部科学省『幼稚園教育指導資料第1集 指導計画の作成と保育の展開』フレーベル館、2013年、p.29。
- 8) 田尻・無藤、前掲書⁴⁾、pp.30-31。
- 9) 保育観とは、子どもたちを保育するうえで、どのように関わり、対応し、教育していくことがよいのかという保育者が考える価値観のことである。
- 10) 指導観とは、保育を通して、どのように子どもを指導していくか、指導する上で留意すべきことは何か、どのような方法で教えるのかなどの指導計画全体を通した構想や指導の方針である。
- 11) 子ども観とは、子どもとはどのようなものであるか、子どもにどのような子ども時代を与えるべきかを問う視点を指す。